人を引き付ける フックを意識した発信を

北室 かず子　ノンフィクション・ライター

連載「外から見える土木」は、社会の声の代表として、土木と直接関係しないさまざまな分野で活躍されている方々から、土木に対するイメージを忌憚なくお伝えいただき、土木へのメッセージをしっかり受け取りたいという企画である。

今回は、JR北海道の車内広報誌『THE JR Hokkaido』を中心に、北海道の幅広い魅力を伝えているライター、北室かず子様に執筆をお願いした。取材を通じ「外縁部から」眺めた土木に対する印象は、私たちにとっても新鮮である。

噛むたびに口に広がるほどよい粘りとやさしい甘み。「ゆめぴりか」、「ななつぼし」をはじめ、近年、北海道米の評判はうなぎ上りだ。「寒冷地の北海道が米どころになった理由は？」と聞けば、大半の道産子が「寒さに強い品種ができたから」と答えるだろう。「広い大地があったから」という人はいても、「土木の力」と答える人が多いとは思えない。もちろん私は取材を通して品種改良への長年の努力と成果に触れて感動した。だがそもそも「広い大地」石狩平野を洪水の災禍から解放したのも、泥炭地が農地になったのも土木の力ではないだろうか。近代治水が始まってからわずか100年で平野部が70㎞もショートカットされ、流域が沃野に変わった川は世界のどこにもないという。

地域で取材していると「コンクリートから人へ」という言葉には違和感を覚える。都会の人には、水がどう制御され、田畑のすみずみに届けられるかを見る機会などないから仕方がないのだろうか。けれどもたったお茶碗一杯のご飯をつくるのに、2ℓペットボトルで約90本もの水が必要なのだ。どんな優秀な品種が開発されても、水がなければ米はできない。山に降った雨や雪を貯めているのは何か。必要な時に必要な量の水を取り入れる頭首工はなんでできているのか。用水路は誰がどうつくったのか。土木技術は、人の命の源、食を支えていると思う。

大学での専攻はフランス現代哲学、新卒で就職した出版社ではモードやアートシーンを追っていた私に、土木に関する知識はまったくなかった。そんな門外漢が、専門家の迷惑を承知で取材に押しかけたのはなぜだったのか、この原稿を依頼いただいたのをきっかけに考えてみた。それは、科学の論理が山や川や大地や海とがっぷり組み合ったときに大きな力を発揮していることに驚異を覚えたからだ。などというと情緒的すぎると批判されるかもしれないが、イデオロギーやメディアのバイアスがかかったものではない、技術の真相を知りたいと思ったのだった。そんな思いを抱いたのは、北海道の地域性が大きく関係していたと思う。明治時代になって主たる開発が始まった北海道では、歴史と近代が直に接している。歴史的建造物も築城のような伝統工法ではなく、近代を象徴するれんがやコンクリートでつくられている。そのため私は、土木構造物を人のなまなましい息吹を伴う人文的存在、地域史を語る歴史的存在と感じた。そんな私にとってJR北海道車内広報誌『THE JR Hokkaido』で企画・執筆の機会を与えられたのは、とても幸運なことであった。明治期の小樽港北防波堤からSPring-8でナノテクノロジーの解析を行う最新コンクリート工学までを取材した「闘う、コンクリート魂」、北海道3大名橋（旭橋、幣舞橋、豊平橋）の技術史と橋梁工学の今を伝えた「橋のダンディズム」、泥炭地を美田に変えた土地改良事業について取材した「石狩平野の仰天発想」、石狩川の治水を支える科学技術の系譜をたどった「石狩川を科学する」などの執筆を通して、著名な土木遺産群の立役者でもある小樽港北防波堤の廣井勇、石狩川治水の岡崎文吉、斜路式ケーソン製作ヤードの伊藤長右衛門、深川林地の深川冬至、旭橋の吉町太郎一、北海幹線用水路の友成仲と平賀栄治、十勝大橋の横道英雄、寒地コンクリート技術の洪悦郎（敬称略）らの偉人を知った。それぞれの時代背景における苦悩、超人的な能力と努力への感動は、執筆後、何年経っても鮮やかに残っている。そしてこうした英雄譚に触れれば触れるほど、現代の技術者の問題意識や使命感、困難を克服した道筋を知りたいと強く思うようになった。

1997年に札幌・大倉山ジャンプ競技場で行われた改修工事は最大37度もの斜度にコンクリートで微細な線形を表現しなければならない難工事だったという。工事を終え、ある工事関係者が選手たちに「飛び心地良く仕上がっていたら、僕のヘルメットにサインをください」とお願いしたそうだ。すると4選手がサインを書いた。翌年、長野オリンピックラージヒル団体で金メダルに輝いたのが、その4人だった。13年後、このエピソードを知った私は「闘う、コンクリート魂」記事にヘルメット画像を掲載させてもらいたいと思った。しかし相手はワールドカップ転戦中の金メダリストだ。わざわざ許可の返事など寄こしてはいただけないだろう。印刷の期日も迫り、掲載を諦めかけた時、携帯が鳴った。「連絡遅くなってすみません、今日、帰国したもので。ああ、ジャンプ台のね、そんなこともありましたね！　もちろん載せてくれていいですよ」。明るく澄んだその声が忘れられない。

こういう経験をすると、もっともっと技術の物語を伝えたくなる。チーム仕事だからといって謙遜せずに個人の喜びや泥くさい苦労を聞かせてほしくなる。かつて私は土木に携わる人びとを、頭はいいが情感に乏しく、上から目線で権威主義的と勝手に想像していた。けれども、取材でイメージは一変した。自然を読み解き、生かそうとする真摯な姿勢を感じている。ただ、表現が画一的で紋切り型なのがもったいない。たとえば魚道について私たちが受け取る情報は「生態系に配慮し設定」くらいのもの。石狩川頭首工は、太古の石狩川をゆうゆうと泳いでいた幻のチョウザメが通過することも想定しているなんてことを知れば誰もがときめく。何が人を引き付けるフックになるかをもっと意識してほしい。

東日本大震災復興、景気回復、東京オリンピックで公共事業への締め付けが減り、一時期と比べると土木広報の切実な必要性が薄まったと、業界誌関係者から聞いた。だとしたらそれは寂しすぎる。メディアを通して発信されるのは、莫大な税金が投入される事業が適切かどうかという政治的解釈をまとった情報が多い。もちろんそれは必要なことだが、もっとニュートラルな地点から、社会の根底を成す技術と思考の体系を発信してほしい。それは科学技術へのリテラシーを鍛え、私たちが自らの文明論を獲得することにもつながると思う。

（担当編集委員：長塚麻子）

写真1　北海道米は「ゆめぴりか」、「ななつぼし」に続き、「ふっくりんこ」も米の食味ランキングで特Aを獲得した。食を支える土木の力を実感する風景

写真2　『THE JR Hokkaido』2011年12月号特集「闘う、コンクリート魂」

北室かず子
KITAMURO Kazuko

1962年徳島県出身。筑波大学第二学群比較文化学類卒業後、婦人画報社で女性月刊誌の編集に携わる。1991年よりJR北海道車内広報誌を中心にライターとして活動。著書に『川は生きている』、『赤れんが庁舎物語』、『いとしの大衆食堂』、『北の命を抱きしめて～北海道女性医師のあゆみ』など。